

千葉県の外來種整理表動物種原案(生態系又は人に対する影響度または緊急度ランクがAのもの)

和名	学名	分類群	土着生息地(原産地)	分布・生息情報			移入経路		移入年代	
				日本での分布状況	千葉県での分布状況	千葉県での生息状況	日本	千葉県	日本	千葉県
アカゲザル	<i>Macaca mulatta</i>	哺乳綱霊長目オナガザル科	インド、中国、東南アジアなど	千葉県	館山市・白浜町・千倉町	生息数・分布が増加拡大中。2004年度の調査で、3-5群、200頭以上が生息と推定。	観光施設orペットの放逐・逸出	観光施設orペットの放逐・逸出	1990年代以前(おそらく太平洋戦争以降)	1990年代以前(おそらく太平洋戦争以降)
アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	食肉目アライグマ科	北アメリカ	日本各地	夷隅地域、君津市、印西市を中心に、県内各地	生息数・分布が増加拡大中。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	1960年代	1990年代
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	哺乳綱偶蹄目イノシシ科	北アフリカの一部からユーラシア	日本各地(国内移入)	房総丘陵を中心とした地域、および下総町・成田市	生息数・分布が増加拡大中。2001年度の調査で、518km <sup>2</sup> に生息と推定。	狩猟目的の放逐、飼育	狩猟目的の放逐。一部に飼育個体の逸出。	不明	おそらく1980年代以降
カミツキガメ	<i>CheLydra serpentina</i>	カメ目カミツキガメ科	カナダ南部からアメリカ合衆国、中部アメリカを経てエクアドル	日本では1970年頃にはペットとして流通し、日本各地の野外から放逐もしくは逃出したとみられる個体が発見されるようになり社会問題のひとつとして注目されるようになった。また、印旛沼以外では神奈川県大磯丘陵でまとまった数が捕獲されたほか、2003年には武蔵野市の保育園(産経新聞03.11.7)、2004年には都内の公園で孵化個体が確認(佐藤 私信)された。	印旛沼周辺では1978年9月に高崎川で捕獲された記録(NHKニュース)が最も古く、鹿島川からも1986年に報告されている(産経新聞1986.6.12)。また、1990年代中頃からは、印旛沼の定置網で混獲されるようになった(千葉日報1998.9.12)。佐倉市の自然環境調査によれば1998年から1999年にかけて35個体が鹿島川、および高崎川で捕獲もしくは確認された(小林他 2000)。	2002年には印旛沼周辺において野外での繁殖(産卵、孵化、交尾行動)が確認された(小林未発表)	ペット用	ペット用	1970年代?	1978年の報告が最も古い記録
ミシシippアカミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	カメ目ヌマガメ科	北アメリカ東部	沖縄から北海道まで全国に定着	都市近郊の河川や調節池	定着し、繁殖していることはほぼ確実であるが、詳細な研究による実証はまだ行われていない。	ペット用	ペット用		不明
アフリカツメガエル	<i>Xenopus laevis</i>	無尾目ピバ科	アフリカ大陸南部	関東地方で確認されているが、定着については不明	利根川・印旛沼水系で記録有り(大根博物館)	利根川下流域では1998年頃から本種の記録が報告されるようになった。複数の個体が複数年に渡って捕獲されていることから、定着している可能性がある。繁殖しているかどうかは不明。	実験動物として	不明	1954年に実験動物として輸入された。野外への逸出年代は不明	1990年代
ウシガエル	<i>Rana (Aquarana) catesbeiana</i>	無尾目アカガエル科	北アメリカのロッキー山脈以東	北海道、本州、四国、九州、小笠原諸島、南西諸島	全域	県内ほぼ全域の池、ため池、湖沼、流のゆるい河川に生息している。	食用として導入	農家の副業として養殖を奨励するため、国家事業として日本各地に配布された。	1918年に日本に導入された	昭和の初期
トノサマガエル	<i>Rana (Pelophylax) nigromaculata</i>	無尾目アカガエル科	本州、四国、九州	北海道にも移入され、定着している	一箇所のみで生息が確認されている	谷津干潟のビジターセンター内の池に定着	国内移入種	不明	国内移入種	1990年代
オオクチバス	<i>Micropterus salmoides</i>	スズキ目サンフィッシュ科	北米大陸南東部	全国の河川緩流域、湖沼、ダム湖、溜池など	県内各地の湖沼、溜池、ダム湖、河川緩流域など	溜池など孤立した止水域や河川館流域などに広く生息している。	神奈川県芦ノ湖への釣目的の放流が初。その後複数回の移植放流の可能性はある	不明であるが、釣り対象魚としての放流が主と推測される	1925年が初。	1965年頃に手賀沼で記録 1983年に印旛沼で記録
ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus</i>	スズキ目サンフィッシュ科	カナダセントローレンス川水系と五大湖以南、ミシシipp川を中心とする北米大陸中央平原	北海道函館周辺以南、ほぼ全国	県内のほぼ全域の河川、湖沼、溜池など	釣り目的の放流と考えられ、大河川や湖沼から、孤立した溜池や部分的にしか生息可能箇所のない小河川などまで、広く生息している	ミシシipp川の採集個体を伊豆半島の一碧湖に放流	主に釣り目的の放流?	1960年	1970年代?
セイヨウオオマルハナバチ	<i>Bombus terrestris</i>	ハチ目ミツバチ科	ヨーロッパ原産	1996年秋に北海道日高地方門別町で自然巣が発見。2001年には静岡県で記録。				温室トマトの受粉昆虫として1992年頃からベルギーやオランダから輸入されている。		
アメリカジガバチ	<i>Sceliphron caementarium</i>	ハチ目アナバチ科	北米	東京周辺	松戸市栗山、市川市八幡、船橋市習志野台・宮本、佐倉市佐倉城址・岩戸・大蛇/白井成田市三里塚御料牧場、山武郡芝山町長生郡一宮町				1945年	
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	二枚貝綱/マルスダレガイ科	有明海/黄海	ヤマト(関東)	東京湾	確実な繁殖は報告されていないが、繁殖の可能性が高い	潮干狩り用アサリ	潮干狩り用アサリ	(国内在来種)	平成時代
イスパニアマイマイ	<i>Eobania vermiculata</i>	腹足綱/リンゴマイマイ科	南ヨーロッパ	ヤマト(関東)	浦安市	浦安市内の2ヶ所で繁殖	植木?	植木?	平成時代	浦安市に局地的に発生
カネツケシジミ	<i>Corbicula fluminea form insularis</i>	二枚貝綱/シジミ科	東アジア	ヤマト・琉球	各地	1990年代には多かったが、近年はやや減少傾向	食用シジミ	食用シジミ	昭和時代(太平洋戦争以降)	平成時代
ゴマフダマ	<i>Natica tigrina</i>	腹足綱/タマガイ科	有明海/黄海	ヤマト(関東)	小櫃川河口干潟	現在までのところ定着は確認できていないが、今後定着の可能性は高い	(国内在来種:主に有明海に生息)	潮干狩り用アサリ	(国内在来種)	平成時代
シジミ類	<i>Corbicula sp. cf. largillierti</i>	二枚貝綱/シジミ科	東アジア	ヤマト(関東)	県北西部	多少不確実であるが、タイワンシジミとは異なるものが市原市等で確認されている	食用シジミ	食用シジミ	平成時代	平成時代
シナハマグリ	<i>Meretrix petechialis</i>	二枚貝綱/マルスダレガイ科	朝鮮半島南岸・中国	ヤマト	東京湾	東京湾で確認されるが、未定着と思われる	潮干狩り用アサリ/養殖	潮干狩り用アサリ/養殖	昭和時代(太平洋戦争以降)	平成時代
スクミリンゴガイ	<i>Pomacea canaliculata</i>	腹足綱/タニシモドキ(リンゴガイ)科	アルゼンチン	ヤマト・琉球	主に九十九里平野	東総地方から南に分布を拡大しており、各地で高密度	養殖	養殖	昭和時代(太平洋戦争以降)	昭和時代(太平洋戦争以降)
タイワンシジミ	<i>Corbicula fluminea</i>	二枚貝綱/シジミ科	東アジア	ヤマト・琉球	主に県北部	着実に増加している	食用シジミ	食用シジミ	昭和時代(太平洋戦争以降)	平成時代
サキグロタマツメタ	<i>Euspira fortunei</i>	腹足綱/タマガイ科	有明海/黄海	ヤマト(関東)	小櫃川河口干潟	着実に個体数が増加している	(国内在来種:主に有明海に生息)	潮干狩り用アサリ	(国内在来種)	平成時代
ムラサキガイ	<i>Mytilus galloprovincialis</i>	二枚貝綱/イガイ科	地中海	北海道・ヤマト	各地	各地で普通に生息している	船底付着	船底付着	昭和時代(太平洋戦争以前)	昭和時代(太平洋戦争以前)

千葉県の外來種整理表動物種原案(生態系又は人に対する影響度または緊急度ランクがAのもの)

和名	体重等	生息環境	生活史	繁殖			食性	生態系への影響	人への被害		
				繁殖場所	時期	繁殖形態			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害
アカゲザル	体重5-8kg 頭胴長47-64cm 尾長19-30cm	陸域：森林	メンバーの決まった数10頭-100頭以上の群れで森林内を遊動する。	森林	不明	1産1子	主に植物の実や葉	ニホンザルとの交雑	農作物被害	現在のところ、なし	現在のところ、なし
アライグマ	体重4-10数kg 頭胴長41-60cm 尾長20-41cm	陸域（森林、農村地域、住宅地など）	木登りが得意。水辺を好む。	樹洞、人家の屋根裏など	春	3-6頭ほどの子を出産	雑食性（昆虫類、小型の脊椎動物、果実など）	採食の影響、在来の中型雑食獣との競合、フクロウ類の繁殖樹洞の占拠	農作物被害	天井裏の糞尿・騒音、飼育魚の捕食	現在のところ、なし（アライグマ回虫の危険性が指摘されている）
イノシシ	体重50-150kg 頭胴長120-150cm 尾長14-23cm	陸域：森林、農村地域	単独ないし母系的な小集団で暮らす。	森林	春-秋	2-8頭（平均4-5頭）の子を出産	雑食性（植物の根茎や堅果、ミズなど）	採食の影響、タカサゴキララマダニの増加	農作物・タケノコ被害	現在のところ、なし	現在のところ、なし
カミツキガメ	甲長45cm以上、体重30kg以上	淡水域	極めて長寿命で飢餓耐性が高いので、一旦定着すると影響が長期化する恐れが高い。産卵数が多く、原産地におけるアライグマのような捕食者が存在しない場合には、個体群の増殖率が原産地よりも高くなる可能性がある。	生息地の河川堤防や周囲の水田畔で産卵が確認されている	6月	卵生、メス1個体が1回の産卵で20-50個の卵を産む。	基本的に水生動物を捕食する肉食性であるが、胃の内容物から水生植物が確認されることもある。	在来の水生生物への捕食圧	農業中に咬傷被害が発生する可能性がある	不明	水辺で遊ぶ子供達が、咬傷被害を受ける可能性がある
ミシシippアカミミガメ	雄、甲長20cm 雌、甲長28cm	淡水域	オスよりもメスの方が大型になり、メスは背甲長が28cm、体重2.5kgに達する。	生息地の池や沼、河川周辺の地面に穴を掘って産卵する	6-7月	繁殖能力が高く、1回に20個以上の卵を年に数回産卵する。	雑食性	雑食性で、水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫などを広く摂食する、在来種の亀類とは、食物や日光浴場所、産卵場所、越冬場所が類似し、競合する	不明	不明	成長した大型個体に噛みつかれた場合、咬傷被害が発生する恐れが大きい。
アフリカツメガエル	体長 50-130mm	淡水域	変態後もほとんど水中で生活し、河川、湖沼から塩性	河川、湖沼から塩性湿地	不明	卵生	在来のカエル類など水生生物を好んで捕食する性質を示す（飼育下での実験データ）。	皮膚に寄生するツボカビが在来種の病原微生物として猛威をふるったおそれが指摘されている	不明	不明	不明
ウシガエル	体長110-185mm	淡水域：沼、用水路、河川	6月以降に産卵されたものはオタマジャクシで越冬し、翌年の6月に変態、秋に変態するオタマジャクシは体長が7cm幼カエルが3.3cm、春に変態するものはオタマジャクシ11-12cm幼カエルが4.5cm 10月下旬-11月上旬に冬眠に入る	湖沼、池、河川の downstream など、広い水面を持ち、かつ水深のある静水域	5月-9月	卵は一週間で孵化しておたまじゃくしとなる。普通はそのまゝ越冬し、翌年の5-10月にかけて変態し、体長40mmの子ガエルになる。	幼少は植物を中心とした雑食。変態後は動物植になる。	幼体はゴイサギなどの鳥類やナマズに捕食されるほか、水生昆虫のマトモムンに体液を吸われることもある。	不明	住宅地周辺の沼地で騒音被害の届けが出ることがある	不明
トノサマガエル	体長40-90mm	淡水域	主に水田と用水路に生息する	水田、池	4-6月		昆虫類に加え、小型の両生類も捕食する	在来の水生生物への捕食	苗代の稚苗が踏み倒される場合がある	不明	不明
オオクチバス	全長50cm	淡水域。汽水域の可能性もあり。止水域や河川緩流域を好む。	春から秋は止水域や緩流域の浅所に生息。初夏に押すが営巣し、繁殖。冬季に深場に移り、集団で越冬。寿命は10数年-20年。稚魚期まではオスが保護するが、5cm位で単独生活に入る。メスは4-5年、オスは3-4年で成熟する。	湖沼等の止水域・緩流域の岸辺の水深1.5mくらいまでの砂底や砂礫底	5月上旬-7月上旬	オスが岸辺の水深1.5m位までの水底に、掃鉢状の巣を作り、メスを次々に誘って産卵させ、孵化後体長5cmになるまで保護する。	体長5cmくらいまでは動物プランクトン、その後肉食性が強まり、多くの魚類を中心とさまざまな動物を食べる	魚類を中心に、様々な動物を捕食することから、生物組成に与える影響が強いといわれ、特に溜池や小規模水域においてこの影響は強いと考えられている。	強度の捕食による在来の漁業対象種の減少があるとされる	なし	なし
ブルーギル	全長20cm	湖沼などの止水域、河川中・下流域の流れの穏やかな場所、小河川の溜りなどで、水草のある場所を好む	流れの緩やかな場所か止水域で、通常は水底近くで索餌行動をとっていることが多い。水草帯を好み、隙間のある人工護岸や漁礁などにもよく集まる。全長25mmくらいまでは水草帯の中で群れ行動をとっているが、その後は自由行動に移行する。	岸近くの浅所砂泥底や砂礫底	主に6月-7月	オスが水底に掃鉢状の産卵床をつくり、メスを呼び入れ産卵させ、仔魚期まで保護する。巣は近接して多数作られ、コロニー状になる。	昆虫類、植物、エビ類、魚類、動物プランクトンなど幅広い雑食性	本種の捕食により在来魚などに大きな影響を与えるとされているが、県内の例で見ると場所の条件で影響の出方が異なるようである。より詳細な調査が必要であろう	捕食による在来種への影響が指摘されている。また、網漁具への入網による作業効率の低下なども考えられる。	なし	なし
セイヨウオオマルハナバチ		陸域						植生などへの影響 在来近縁種と競合・駆逐の可能性 交雑による遺伝的攪乱 北海道日高地方では広範な野生植物、栽培植物を利用し、盗蜜を高頻度で行う。			
アメリカジガバチ	体長20-25mm	陸域						本種との競合により在来種キゴジジガバチが絶滅の危機にある。			
アサリ	殻長3 cm程度	海域：潮間帯から上部浅海帯の砂/砂泥底	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する	受精は水中で、定着場所は成体と同じ	主に春と秋に産卵	体外受精（放卵放精）	懸濁物食	不明（他動物の餌）	混入による在地個体群の価格の低下等	不明	なし？
イスパニアマイマイ	殻径3 cm程度	陸域：開放地	受精後、産卵し、孵化後、幼貝から成貝に成長	成体と同じ	不明	体内受精（卵生/直達発生）	生きた植物体や落葉等	不明	農作物の食害の可能性	家庭菜園での食害の可能性	広東充血戦中の中間宿主の可能性
カネツケシジミ	殻長2 cm程度	淡水域：人里周辺の流れの弱い流水域や止水域	体内で稚貝となり、体外へ放出され、幼貝から成貝へ成長する	受精は体内で、定着場所は成体と同じ	不明（冬季には行わない？）	体内受精（放精：雄性発生）	懸濁物食	在来のマシジミとの置き換わり	不明	不明	なし？
ゴマフダマ	殻高2.5 cm程度	海域：潮間帯から上部浅海帯の砂/砂泥底	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する	成体と同じ	不明（冬季には行わない？）	体内受精（卵嚢 [砂茶碗] 形成）	二枚貝等の貝類	在来種の捕食	有用二枚貝類の捕食	不明	なし？
シジミ類	殻長2.5 cm程度	淡水域：人里周辺の流れの弱い流水域や止水域	幼貝から成貝へ成長する	受精は体内で、定着場所は成体と同じ	不明（冬季には行わない？）	体内受精（放精）	懸濁物食	在来のマシジミとの置き換わりの可能性	不明	不明	なし？
シナハマグリ	殻長8 cm程度	海域：潮間帯から上部浅海帯の砂/砂泥底	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する	受精は水中で、定着場所は成体と同じ	不明（冬季には行わない？）	体外受精（放卵放精）	懸濁物食	不明（他動物の餌）	不明	不明	なし？
スクミリンゴガイ	殻長6 cm程度	淡水域：水田等の止水域や緩やかな流れの流水域	卵から幼貝で孵化し、成貝に成長する	成体と同じ	冬季以外	体内受精（卵生/附着卵産卵/直達発生）	生植物を含む植物体	植物の食害（他動物の餌）	水田作物の食外	不明（大量死亡時の水質悪化等？）	広東充血戦中の中間宿主
タイワンシジミ	殻長2 cm程度	淡水域：人里周辺の流れの弱い流水域や止水域	体内で稚貝となり、体外へ放出され、幼貝から成貝へ成長する	受精は体内で、定着場所は成体と同じ	不明（冬季には行わない？）	体内受精（放精：雄性発生）	懸濁物食	在来のマシジミとの置き換わり	不明（国外では用水路等の送水阻害がある）	不明	なし？
サキゴロタマツメタ	殻高5 cm程度	海域：潮間帯から上部浅海帯の砂/砂泥底	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する	成体と同じ	不明（冬季には行わない？）	体内受精（卵嚢 [砂茶碗] 形成）	二枚貝等の貝類	在来種の捕食	有用二枚貝類の捕食	不明	なし？
ムラサキガイ	殻長6 cm程度	海域：潮間帯から上部浅海帯の基質に足糸で附着	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する	受精は水中で、定着場所は成体と同じ	産卵は春から秋	体外受精（放卵放精）	懸濁物食	不明（在来種の定着場所被覆・海水の濾過・他動物の餌/生息場所）	船底や養殖施設を含めた漁業関係資材への附着が認められる	発電所の取・排水管への附着による効率悪化	なし？

千葉県の外来種整理表動物種原案(生態系又は人に対する影響度または緊急度ランクがAのもの)

和名	生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度		対策		文献		写真・標本の有無(保管先)	備考
		緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県		
アカゲザル	A	A	ニホンザルとの間で交雑がすでに確認されており、危機的状況にある。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・全頭捕獲・食害の技術的防除	なし	房総のサル調査会編(1999)、萩原・川本(2001)、萩原ほか(2003)、川本ほか(2004)		
アライグマ	B	A	北海道や神奈川県からの状況から今後、農作物被害や生態系への影響が増大するものと予測される。繁殖・定着が確認されているのは県内3地域であり、定着初期における早急な対策が望まれる。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・食害の技術的防除・捕獲駆除	外来種ハンドブック(日本生態学会 2002)、鈴木(2005)	落合ほか(2002)		尾に数本の黒い縞模様がある。
イノシシ	B	A	近年、県内における農林作物被害金額が1億円を超えており、総合的な対策が必要である。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除	外来種ハンドブック(日本生態学会 2002)	浅田ほか(2001)、房総のシカ調査会編(2001, 2002)		国内外来種。イノブタを含む。在来個体群は昭和40年代ころに絶滅した可能性が高い。
カミツキガメ	A	A	定着個体群の総個体数および分布範囲が限られているうちに駆除を実施することが必要。時期が遅くなればなるほど、駆除は困難になる	飼育個体の遺棄防止	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を旨とした試験的駆除の実施	日本生態学会編・村上興正・鷲谷いずみ・監修(2002) 外来種ハンドブック、地人書館。			
ミシシippアカミミガメ	A	B	生息範囲の把握と駆除方法の確立が先決。	飼育用の販売を禁止する	なし	日本生態学会編・村上興正・鷲谷いずみ・監修(2002) 外来種ハンドブック、地人書館。			
アフリカツメガエル	A	A	繁殖力が高く、定着個体が長生きすることから、発見されしだい駆除を実施すべき。	効果的な捕獲方法の検索・開発による駆除、野外放逐の禁止	なし	日本生態学会編・村上興正・鷲谷いずみ・監修(2002) 外来種ハンドブック、地人書館。	小林頼太・長谷川雅美(2005) 関東平野におけるアフリカツメガエルの確認記録と定着可能性。爬虫両生類学会報2005(2):169-172。		養殖業者が野外に放逐しようとして現場で差し止められた事件あり(千葉県立中央博物館、尾崎主任研究員のメモがある)。野外での越冬が可能など耐寒性を備えている(千葉大学構内の池での越冬記録あり)。
ウシガエル	A	B	個体群制御の手段として、商業的な利用を促進させる。	野生個体を実験材料、科学的研究の材料として利用し、制御のつなげる	なし	日本生態学会編・村上興正・鷲谷いずみ・監修(2002) 外来種ハンドブック、地人書館。			国内移入種
トノサマガエル	情報不足	A	小規模な集団であるので、早急に駆除を実現するべきである	現在定着している地域からの根絶	なし				国内移入種
オオクチバス	AまたはB、時にC	AまたはB	在来魚種や多くの水生生物への捕食圧による漁業資源減少や生態系悪化のため緊急に防除が必要とされる	特定外来生物への指定。県条例で移植放流禁止	なし	環境省編(2004)ブラックバス・ブルーギルが在来生物群集及び生態系に与える影響と対策、(財)自然環境研究センター。川那部浩哉・水野信彦編・監修(1989)日本の淡水魚、山と溪谷社。中坊徹次編(1993)日本産魚類検索、東海大学出版会。日本生態学会編、村上興正・鷲谷いずみ監修(2002)外来種ハンドブック、地人書館。	千葉県生物学会編(1999)千葉県動物誌、文一総合出版。千葉県史料研究財団編(2002)千葉県の自然誌、本編6、千葉県の動物1千葉県。		本種と同様の問題があるとされるブルーギルが一緒にいる場合、両種の競合関係があるのではないかと指摘あり
ブルーギル	AまたはB、時にC(情報不足)	AまたはB、時にC(情報不足)	影響について水域ごとの調査が必用	県条例で移植放流禁止		環境省編(2004)ブラックバス・ブルーギルが在来生物群集及び生態系に与える影響と対策、(財)自然環境研究センター。川那部浩哉・水野信彦編・監修(1989)日本の淡水魚、山と溪谷社。中坊徹次編(1993)日本産魚類検索、東海大学出版会。日本生態学会編、村上興正・鷲谷いずみ監修(2002)外来種ハンドブック、地人書館。	千葉県生物学会編(1999)千葉県動物誌、文一総合出版。千葉県史料研究財団編(2002)千葉県の自然誌、本編6、千葉県の動物1千葉県。		
セイヨウオオマルハナバチ	A	A		逸出防除ネットの展張、使用済み巣箱の適正処理の普及を図る。		確認文献; 11 鷲谷いづみ・松村千鶴(2002)セイヨウオオマルハナバチへ研究者有志による監視活動、日本生態学会(編)外来種ハンドブック、地人書館、p.145 鷲谷いづみ他(1997)。マルハナバチ・ハンドブック、文一総合出版。			
アメリカジガバチ	A	C				朝比奈正二郎ほか(1965)、原色昆虫大圖鑑、北隆館、東京、p.299	確認文献; 1 須田博久(1999)千葉県産有刺類のハチ、千葉県生物学会(編)千葉県動物誌、東京、p.786千葉県動物誌		
アサリ	B	A	外来個体群が増加すると、水産上在来のブランドが下がる可能性が高い	移入アサリのチェック; 食用移入の投棄禁止; 養殖・蓄養の制限	特になし; [産地表示の明確化]				国内外来的なもの
イスパニアマイマイ	C	A	被害は出ていないが、生息地が限定されており、定着初期なので、根絶できる可能性もある	苗木等の移動時のチェック	薬剤散布や生息環境の改悪	上島・他(2004)		上島・他(2004)	
カネツケシジミ	B	A	着実に分布を広げており、在来種のマシジミを駆逐する可能性がある	移入シジミのチェック; 食用移入の投棄禁止; 養殖・蓄養の制限	特になし; [産地表示の明確化]	諸喜田(1984); 増田・他(1998); 日本生態学会(2002)		黒住・他(2004)	
ゴマフダマ	A	A	未だ野外での繁殖は確認されていないが、個体が増加すると影響がそうなので、早めの対策が必要	移入アサリのチェック	特になし; [産地表示の明確化]			黒住・岡本(1996)	野外逸脱的、国内外来的なもの
シジミ類	C	A	着実に分布を広げており、在来種のマシジミを駆逐する可能性がある。まだ定着地は少ないようである。	移入シジミのチェック; 食用移入の投棄禁止; 養殖・蓄養の制限	特になし; [産地表示の明確化]	根本・他(2003)			
シナハマグリ	C	A	定着する可能性は低い、逆に定着等が認められれば、初期の根絶等が可能かもしれない。	移入ハマグリ・アサリのチェック; 食用移入の投棄禁止; 養殖・蓄養の制限	特になし; [産地表示の明確化]	日本生態学会(2002)		岡本・黒住(1996)	
スクミリンゴガイ	A	A	現実的な農業被害が出ているので、早急な対策が必要。ただ全国でも根絶等はできていない	植物防衛法の遵守; 国内移動の制限	取水口からの侵入防止/捕殺・厳寒期のロータリー耕・登録薬剤による防除	宮崎(1985); 日本生態学会(2002)		入村・細川(1993)	
タイワンシジミ	B	A	着実に分布を広げており、在来種のマシジミを駆逐する可能性がある	移入シジミのチェック; 食用移入の投棄禁止; 養殖・蓄養の制限	特になし; [産地表示の明確化]	増田・他(1998); 日本生態学会(2002)		新島・田中(2000); 千葉県史料研究財団(2002)	
サキグロタマツメタ	A	B	有用貝類への捕食が認められるが、個体数が増加しており、駆除等は困難	移入アサリのチェック	一部、見つけ採り; [産地表示の明確化]	酒井(2000); 大越(2003)			国内外来的なもの
ムラサキイガイ	A	C	IUCNワースト100; 個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。足糸で付着するので、他生物等への影響大?	バラストタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック; 塗料等による付着面への定着阻害	塗料等による付着面への定着阻害と人力による除去	金丸(1935); 梶原(1985); 日本生態学会(2002)		朝倉(1992)	